

七夕説話のシンボリズム

杉谷 隆

七夕説話には、「織女・牽牛の星物語」と「天人女房」の2系統があり、いずれも日本で広く受容されてきた。星物語では天河に橋渡しをする役でカササギが登場するが、日本では馴染みのある鳥ではない。一方、天人女房では狂言廻しふうにウリが登場するが、これも原産植物ではない。

本稿では、これら2つの動植物について若干の資料整理をし、それらのシンボリズムについて、やや自然科学的な立場から考えてみたい。

1. 1 カササギの名称と分布

カササギ（鵲, *Pica pica*）は、同科のカラス類とともに、主に温帯地域の人里にありふれた野鳥である。しかし、日本列島では主に九州北部にしか生息せず、天然記念物に指定されている。

カササギの「カサ」は、朝鮮語¹⁾でカササギを意味する「カチ」または「カシ」で、後ろの「サキ」は「鵲」の中国音を付す朝鮮独特の造語法とされる（『大言海』）。「カチ」はカシャカシャという鳴き声の擬音だろう。

佐賀ではカチガラスと呼び、豊臣秀吉の朝鮮侵略（朝鮮側呼称では壬辰丁酉倭乱・イムジンジョンユウラン）時に、佐賀・柳川の軍勢が「勝ち勝ち」と鳴く鳥を連れ帰ったという俗説がある。しかし、「カチ」は朝鮮語の借用と考えるほうが素直である。他にも朝鮮鳥、高麗鳥、唐鳥などの別称がある。

日本列島のカササギは、以上のように朝鮮半島との密接な関係が想定され、動物図鑑類が移入鳥とみなしているものの、その由来や偏在の理由は明かでない。おそらく、分布を規定する第一要因は、知能が高く抜群の適応力があるカラスとの競合と考えられる。このとき、カラスは基本的に森林棲だが、カササギは木立のある開けた低地を好むので、日本列島では古くから開発が進んだ九州北部の低地が好条件だったろう。しかし、カササ

ギのヒナがカラスに襲われる例も多く、巣立っても遠方へは拡散しないので、分布を広げる力は弱い（武石, 1997）。

近年は新潟県や長野県でも発見されている²⁾。武石は分布拡大の原因を開発による森林減少に求めているが、筆者もそれは妥当だと思う。

1. 2 中国古文献での生息の有無

3世紀に成立した『三国志』魏書・東夷伝倭人の条は、邪馬壹（台）国を「無牛馬虎豹羊鵲」と記している。倭の文物に関する記述は、照葉樹林文化論の観点から、1世紀に成立した『漢書』の広東地方の描写に酷似することが指摘されるが（大林, 1979；石原, 1985）、上掲節に対応する『漢書』の記述は「亡馬与虎, 民有五畜」で、いささか異なる。この相違は、中国人が倭をきちんと観察したことを意味しており、「無鵲」の信憑性を高める。

「鵲（シヤク；現代音チュエ）」の字義は、諸橋『大漢和辞典』や中国の『漢語大詞典』『現代漢語詞典』などによれば、古今通じてカササギ種を特定する。その鳴き声は吉兆とされ、鵲語、鵲報などの熟語にもなってよく認識されていた³⁾。

戦国時代の逸話を漢代に編纂した『戦国策』では、カササギとカラスが容易に識別できるという話を載せており、古代中国で両者が混同された可能性はない。六朝時代の『搜神記』は、カササギとカラスの争いが武将の勝敗を予兆した話を載せており、両者の生態的競合関係も認識している。黒一色で賢く攻撃的なカラスは、多くの民族が鳥を越える不気味な存在と考えてきた。一方、白い模様が入り、小型で長い尾をよく振るカササギは、心情的にも愛すべき野鳥の範疇にある。

邪馬壹国がどこにあったのかは、周知のように異論が多い。現在の考古学的知見に従って大和説をとれば、そこにカササギがいなかったという情

報を得ても本稿には有益でない。九州北岸の末廬国や奴国には、氷期の海面低下期いらい残存してきた、または多数の渡来人⁴⁾が観賞・祭事用に連れてきて野生化したカササギが、そこかしこにいたかもしれない。渡来は中世まで綿々と続いたので、唐人町⁵⁾の庭先にカササギがいても何ら不思議ではないが、文献上はいささか頼りないところがある。

1. 3 日本古文献での生息の有無

『播磨国風土記』の船引山(比定地不詳)の説明には、「此山住鶴。一云韓国鳥。栖枯木之穴。春時見夏不見」がある。同書は朝鮮との交流を濃厚に示し、動植物の記載も手堅いので、この記述は信憑性が高い。しかし、カササギは樹上に枯枝で大きな球形の巣をかけ、かつ留鳥で1年を通してナワバリを維持する。同書にいう生態の特徴は、カラスとしては小型で冬鳥のコクマルガラス(*Corvus dauuricus*)、とくに白い模様が入る淡色型と混同した疑いが残る。

一方、『日本書紀』には朝鮮からカササギを貰った事実がある。したがって、大和近辺には生息せず、それを朝鮮側も熟知して友好記念動物に選んだことがわかる(あたかもジャイアント・パンダのように)。

肝心の『肥前国風土記』と『豊後国風土記』は、ともに全般的に動植物の記載を欠くので、カササギの有無を判断できない。九州地区では、太宰府官人が風土記の原稿を簡略化してしまったらしい(吉野, 1969)。他の風土記や逸文にもカササギの記載はない。

ところが、奈良時代末の『万葉集』以降の詩歌集では、カササギが人気のある鳥になる。「七夕に天河に懸かる鶴橋を渡って牽牛(牛郎)と織女が逢瀬を楽しむ」という考案の漢詩が輸入され、そのロマンスシズムが日本人にも愛されたからである。七夕(現代音はチーシだがすでに古典語)を「タナバタ」と訓じるのは、織女が操る「棚機」の意である。ただし、原典では織女をして渡らしむが、妻問婚の日本版は牽牛をうろつかせ、男性作者自身を投影した。

しかし、当時の日本人がカササギの実物を知っていたかどうかは、疑問視されている。例えば、『源氏物語』浮舟帖で苦悩する薫と浮舟の背景に

描写された、「さむき(宇治川の)洲崎にたてるかささき」は、地形や動詞「立つ」が長脚の水鳥を暗示する。中村ほか編(1982)や菅原・柿澤(1993)は、「かさ」を頭部の飾羽(笠)と解してアオサギ(*Ardea cinerea*)に比定している。山岸(1963)も同じ解釈からチュウサギ(*Egretta alba*)だというのが、浮舟帖の期間である1~3月には、同種のほとんどは南方に渡っていたはずである(成末, 1996)。

紫式部が加佐々木(『倭名類聚鈔』)をサギ科と誤解して生態を捏造したのか、サギの一種のつもりで偶然に同音になったのか不明だが、人騒がせな記述である。彼女は漢籍に学んで風物描写に長けたとされるが、平安女房に博物学的正確さを期待できないだろう。

1. 4 近世文献での生息の有無

近世まで下ると、むしろ正確な文献があり、近年見るようになったという記述がある。

18世紀初頭の寺島良安『和漢三才図会』の説明は、明代の李時珍『本草綱目』の丸写しだが、「最近は中華からやってきたものを偶々みる」と付言する。それが良安が住む大坂での自然現象だったとすれば、分布域の拡大が推測される。

小野蘭山『本草綱目啓蒙』(1803~06刊)は、カササギが筑前・筑後・肥前・肥後に多く、カラスと雑居し被害を受けることや、体型・体色の特徴を詳述している。驚くべきことに、肥後にはアルビノ群がいることさえ指摘している。このような群れは短期間では成立しないと思えるので、集団遺伝学や動物社会学の方面から検討する必要がある。さらに、日本と近隣諸国に現存するカササギの遺伝子分析がなされれば、相互の関係が明かになるかもしれない。

考証学の伴信友(1773-1846)は、『比古婆衣』の中で、「もと韓国の産にて、漢国にては鶴といへるものにて(中略)近世、西国の方、所々にいできて、なべて朝鮮鳥と呼び(中略)もと、から国より渡り来たれるが、漸く蕃息したるなりと語り伝ふ」と記述する(山岸, 1963)。

嘉永年間(1848-53)と推定される著者不明の『肥前名物題註』は、佐賀平野に高麗鳥・勝鳥がいて捕獲禁止であると記載する(福岡, 1974)。先祖が移入したと主張する藩主の権威乱用を感じ

はするが、野鳥保護の先駆けといえるだろう。

1. 5 七夕と鵲橋

北京スタンダードの七夕説話は前述した星物語で、「天帝の娘の織女星は機織りが上手だったので、働き者の牽牛星と娶せた。すると仕事を怠けたので、怒った天帝は二人を天河の両岸に分かった。七夕にだけ、鵲の群が懸ける橋を渡って二人は会うことが許される」とされている（直江、1968）。

ただし、この構成に至るまでに、概略次のような発達過程をたどったという（佐藤、1994）。①東周：織女・牽牛の2星が並び称されるようになるが、当初は牽牛がウシだった。②後漢：牽牛がヒトになり、2星は相愛関係だが離ればなれであるという解釈ができる。③六朝：2星は夫婦だが七夕にだけ鵲橋を渡って逢瀬を許される、という形式が完成する。④中唐：鵲橋が盛んに詩に詠まれるようになる。

唐代の『藝文類聚』が引用するところによると、後漢の歳時記といえる『四民月令』の7月7日の説明には、「曝経書，設酒脯时果，散香粉於筵上，祈請於河鼓（＝牽牛）織女，言此二星神當会」とある。したがって、2星の出会いを祭るようになったのはかなり古いらしい。

その出会いの手段としての鵲橋は、起源が判然としない点がある。佐藤（1994）は、すでに漢代の数種の書物に見えろとし、後漢の『風俗通義』を紹介している。ただし、この記述は現存本にはない。唐の白居易が編纂した『白氏六帖事類集』は、詩文のキーワード辞典といった書物だが、「鵲」の項目に「填河」をあげ、漢代の『淮南子』から「烏鵲填河成橋渡織女」を引用する。しかし、この記述も現存本にはない。同じ唐代の徐堅が編纂した『初學記』は、梁代の「玉匣卷懸衣，針縷開夜扉，姮娥隨月落，織女逐星移，離前忿促夜，別後对空機，倩語雕陵鵲，填河未可飛」という詩を採録している。

これらの書物から、唐代には鵲橋・填河がキーワードとして確立したことがわかる。『初學記』が採録する別の梁代の詩には、「含嬌渡浅河」つまり織女が浅瀬を渡ると解される表現もあり、梁代は過渡期にあったのかもしれない。膨大な唐詩群を題材別に集大成した『唐詩類苑』を調べてみ

ると、七夕関連の詩は55篇あり、その3割の16篇にカササギが登場している。平安知識人の感性は、その斬新なアイデアを最新ヒット・チャートよろしく読みとったのだろう。日本のインテリは、昔から文化的に軽薄だったのである。

しかし、鵲橋は日本ではほとんど定着しなかった。表のインターネット検索結果では、日本の七夕でのカササギ登場率は、総合的に見ると数%だろう。一方、中国系では、絞込み検索はできなかったが、牽牛・織女の半数くらいは鵲橋が検出される。ただし、鵲橋（チュエチャオ）は、現代でも「デート」の意味で七夕とは独立しても使われる言葉である。中国人は言葉の物持ちが大変よく、当世ラヴ・ソングでも比翼鳥（ピーイーニャオ）とか連理枝（リエンリーチー）などの文句が耳に飛び込んできて驚かされる。この伝統は、裏からいえば、彼らが言語的シンボルに拘束されやすいことを示している。

しかし、鵲橋の発想は、その生態から考えて筆者には不可解である。水面に密集したり、あるいは橋のようにも見えるV字編隊をなして夜間も飛び続けるのは、むしろガン・カモ類だからである。したがって、何らかの中間項を入れるとか、別種の鳥を原型とするような説明がさらに必要ではな

第1次検索		絞込み検索			カササギ登場率
検索語	検出数	かささぎ	カササギ	鵲	
七夕	>40000	129	111	65	0.006
天の川	12663	126	88	57	0.017
牽牛	1156	66	50	42	0.10
彦星	3839	60	47	21	0.028
織り姫	7990	79	60	28	0.017

注：Infoseek JAPAN による。カササギ登場率は、

「かささぎ」と「カササギ」の和で計算した。

検索語	検索エンジン・検索語別の検出数と、「鵲橋」検出数の比			
	Yahoo	比	Lycos	比
乞巧節	66	26	69	25
七夕	5540	0.31	5195	0.34
天河	6200	0.28	5546	0.32
牽牛	1930	0.90	3296	0.54
牛郎	2480	0.70	3529	0.51
織女	1700	1.02	3182	0.56
鵲橋	1740	1	1795	1

注：検索エンジンは、いずれも繁体字使用の

中国版である。絞込み検索は不能。

いだろうか。その屈曲したシンボルが定着するには、中国でも唐代までかなりの時間を要した、と話を落とすほうが了解しやすい。

2. 1 天人女房

前表には、もう1つ興味深い点がある。中国系では牽牛(牛郎)の検出数が織女より幾分多いが、日本では逆に織り姫人氣が圧倒的に高い。なぜこれが興味深いかというと、中国で7月7日に催される乞巧節(チーチャオチエ)こそ、女子が織女星を祭って裁縫の巧(うまさ)を乞(ねが)うという、ジェンダーの祭事だからである。

容易に考えつく解釈は、日本人は家畜をほとんど飼育しなかった世界に希な民族であり、牛飼いに馴染みがないからだろう。しかし、それで論を終えるのは惜しい。以下では、日本の七夕が持つ意味を少し掘り下げ、最後にはその自然観にまで大風呂敷を広げようと思う。

乞巧節は周辺諸国にも伝播したが、それぞれの民間習俗と重なって受容され、朝鮮では曝衣⁶を、日本では七日盆や水神祭、宮相撲などを行ってきた(和歌森, 1970; 依田, 1991)。日本では七夕は秋の豊作を期待する時期にあたり、干ばつ、虫害、風水害などが起こらないように、水神に祈願したのである。笹飾りを立てたり詩歌を詠んで星を祭る形式の七夕は、近世後期江戸の武家や吉原、寺院でこそ盛んだったが(斎藤月岑『東都歳時記』)、全国的には1割以下とはるかにマイナーだった(柳田國男『年中行事』)。

じつは、タナバタが織女の棚機⁷の意であると前述したのは厳密には間違いで、日本の織り手と織女星とは「同一人物」ではない。日本では星祭りが伝わる以前から、水辺で乙女が水神の訪れを待ちながら機を織る民間習俗があり、その乙女を「棚機つ女」と呼んでいた(吉成, 2000)。さらに吉成によれば、七夕に女性が洗髪や水浴をすることの基層には、正月の若水に対応する「生命の水」をいただく意味があるという。

雨が天から降ってくることから発想された説話として、日本の七夕で挙げられるのが「天人女房」である。これもまた東アジアに広く伝わる説話だが、日本版の標準構成は以下ようになる(稲田, 1988)。

①水浴する天女の羽衣を男が隠して妻にし、子

をもうける。②妻は子に教えられて羽衣を見つけ、瓜の種を残して昇天する。③男が種を植えると蔓は天まで伸び、それを登って天界へ至る。④婚姻を認めない義父母が畑仕事の難題を出す、妻の助言で解決する。⑤男が畑の番をしながら、妻の助言を破って瓜の実を縦割りにすると、あふれ出した洪水でできた川が二人を隔てる。⑥妻は男に7日ごとに会おうと告げるが、男は7月7日と聞き違えてしまう。

この構成は、星物語とは系統が異なり、かつ鶴橋の要素が加わる前に日本に伝播したと推定される。中国少数民族の苗族は、日本版に似た構成の説話を伝えるが(村松, 1974)、男はウリの代わりに天馬に乗って昇天し、④まででハッピー・エンドになる。直江(1968)が紹介する中国山東版では、男が飼っているウシが義姉の出す難題に助言し、その助言によって天河で水浴する天女をも妻にする。後に天女が服を見つけて逃げだすと男が追ってきたので、天女の母親が地上に川を出現させて阻み、二人は七夕にだけ天地をつなぐ鶴橋を渡って会うことになる。この話は、後代に星物語と無理に合成したらしく、牛飼いや鶴橋が登場しつつ天地が非論理的に交錯している。

類話を挙げだすときりがないが、日本では天人女房説話は沖縄諸島により濃く残っている。九州では男を「犬飼」とし、上述の山東版のウシの代わりにイヌが男を助ける話が多い。これを柳田は「犬飼七夕」と呼んでいる。

2. 2 瓜と七夕

ウリが日本の七夕説話に登場する理由は、旬の果物であることは当然として、第一には水神への供物だからであり、河童がキュウリを好むのと同根であるとされる(和歌森, 1970; 小野, 1984)。ウリから洪水が出るのも、表面的には水神祭に直接に関連するだろう。第二には、柳田が「天の南瓜」で「ジャックと豆の木」と対比して述べるような、蔓植物が異常成長するという奔放な空想性も認めていだろうか。

しかし、ウリ類は日本列島には原産しない。鄭(1992)は、朝鮮から漬物や酒造技術などと前後して伝播したといい、古代朝鮮語のオリが語源だという。朝鮮には、ヒョウタンの器で男が昇天する天人女房説話もある(柳田「犬飼七夕譚」)。

また中国でも、前述の『四民月令』に「設酒脯時果」とあるように、季節の果物を供える風習があった。ウリと明記しているのは、南北朝時代の長江中流域の民俗行事を記録した『荆楚歲時記』で、「七夕には女子が針に糸を通し、または金・銀・真鍮で針を作り、庭に瓜を並べて巧を乞う。翌朝に瓜の上に蜘蛛が糸を張っていたら、願いがかなうしるしとする」という内容の記述がある。さらに朴による註に、「織女は瓜果をつかさどる」とある。

以上を考慮すると、ウリは日本版七夕の独創でも何でもない。このとき、ウリ類は縄文遺跡からも種が発見されている古い栽培植物なので、鄭が想定するよりもはるかに古い東アジア圏の文化交流を考えるべきである。

ここで思い出されるのが、「瓜子織姫」である。これはウリから生まれた機織りの巧い娘を主人公とする説話だが、中国風にモモが登場する「桃太郎」よりも古い形式であると柳田は考えている。しかし、たとえウリまで遡っても、「織女は瓜果をつかさどる」という中国人の観念に直結していることは明かである。ただ、古代日本人はウリに独自の解釈を加えたように筆者は思う。

2. 3 瓜のシンボリズム

天人女房で、ウリを横に切らないと洪水が起こる理由は何だろうか。なお、横に切るとは、実の先端と付根とを結んだ〔回転対称軸〕を含む平面で切る、という意味らしい。

植物学的に考えれば当然である。種子は軸に沿って並ぶので、三日月メロンや白瓜奈良漬のように切るほうが種を除きやすい、というだけの話である。しかしそれでは愛想がない。

柳田は、このウリをヒョウタンとみて、横に切らないと浮船にならないからと説明する（「天の南瓜」）。谷川（1983）は、切り方には言及しないが、ヒョウタンがひろく人類誕生の容器とみなされてきたシンボリズムに注目している。あるいは、小さな容器の水があふれて海ができたという太平洋諸島の創造神話（大林，1993）とも、発想が似ている。

天人女房が婚姻譚である以上、生殖を避けては通れない。筆者は、谷川説に与するだけでなく、踏み込んでウリを「子宮」だと解する。その認識

には、柳田も「瓜子織姫」において一步手前までいっていたはずである。スイカやマスクメロンで特徴的だが、これらの果実が肥大するときには、表皮組織が裂けて筋模様ができる。妊婦の腹部にも全く同じ原理で妊娠線が現れる。ウリと筋模様に連想関係があることは、イノシシの幼獣を背中の白筋から「瓜坊」と呼ぶことでも確かである。妊娠の要素を導入すると、イヌの助力が安産の暗喩として生きてくる。残る問題は切断の禁忌だが、まさか帝王切開ではあるまい。

2. 4 瓜の禁忌と鎮魂

ウリの禁忌は、じつは食べることで自体にあり、すなわち妊婦との性交だったと筆者は解する。それを破ったために、あたかも洪水のように破水したというのが、医学的普遍性を持ち自然である。同類の発想はマルケサス諸島の神話にもあり、女神が流産したときの羊水から海ができたと伝える（大林，1993）。天人女房にいう妻との別居や年に1度の逢瀬は、妻が流産で他界し⁷⁾、靈魂が祖霊祭（七日盆）のときに帰ってくることを意味しているに違いない。

「横切り」はむしろ枝葉で、女子外性器の形状を示すような、バレのクスグリだったのではないだろうか。昔は周知の暗喩でも、時を経て意味不明になってしまう例は多い。そもそもこの説話は、冒頭から出歯亀と着衣泥棒をやったのけ、かなり卑猥である。しかしそれは、豊作祈願祭が必然的に求める性的興奮だったのだろう。

さらに深層のシンボリズムを求めれば、ウリは若い果実を食べる⁸⁾。中の空洞⁹⁾には未熟な種子が入っているが、それは子宮壁に着生した胎児を連想させる（生物学上も両者は似ている）。それを「搔爬」しないと実を食べることはできない。じつは、機織りに欠かせない養蚕においても、糸を繰るためには繭を煮て中のサナギを殺さなければならぬ。筆者はそれを製糸工場で見学したことがあるが、その悪臭以上に、ある種のおぞましさを禁じえなかった¹⁰⁾。

縄文時代に畑作や養蚕の文化を受容したとき、それらを直接担った女性たちは、空洞の中で出生を待つ生命を未熟なまま殺すことに対する、怖れや罪を感じたかもしれない。原始七夕には、自然魂を鎮め、「文化という罪」を贖う意味があった

かもしれない。筆者がいま関心を持つ自然観とは、そういう根元意識である。

謝辞

本学言語文化学科教授を長年勤められ、学長の大役を終えて今春退官された佐藤保先生には草稿を読んでいただき、漢籍について多々貴重なご教示をいただいた。心から御礼申し上げる。なお、本稿の解釈は筆者の拙い読解に基づくものであり、文責は筆者にある。

注

- 1) 本稿では、歴史的かつ総称的な地域名として「朝鮮」・「中国」を用いる。その住民や言語についても同様とする。
- 2) 細野哲夫のホームページ
<http://www.janis.or.jp/users/cyapica/kasasagi.htm>
による。ここに引用された鳥類学文献は未見。
- 3) 英名 magpie, 仏名 pie, 独名 Elster には「おしゃべり」の意味もある。
- 4) たとえば弥生時代の吉野ヶ里集落は、人類学的形質から北部九州型と分類される渡来人が、先進的で大規模な計画のもとに造ったものである。古代日本列島の人類・社会・文化の形成に、渡来人は大きく関与した(埴原, 1993など)。現在は「帰化人」の用語は使われない。
- 5) いわゆるチャイナタウンではなく、中国・朝鮮系住民居住区の総称であり、西日本各地にあった。逆に海外には日本人町ができた。
- 6) 「虫干し」のこと。学者は蔵書を並べて学識を誇示した。じつは、この風習は古くは中国にもあったことは、前述の『四民月令』の「曝経書」でも明かだ。筆者が調べた唐代の七夕詩でも数編が詠んでいる。本稿全体の趣旨がそうなのだが、「これこそ我国オリジナル」というものはほとんど存在せず、たいていは中国にその原型か類似物がある。
- 7) 「彼岸に行った」と表現するほうが、まさにぴったりする。しかし、彼岸は仏教語であり、ここでの議論からいえば新しい言葉なので、あえて使用しない。なお、英語にもよく似た表現があり、the Great Beyond という(英文要約参照)。
- 8) 学生諸君には説明が必要か。未熟果の典型はキュウリで、収穫期日を逃すと肥大しすぎて歯応えがなくなるので、野菜農家は毎日忙しく働く。完熟すると黄色くなるので黄瓜と呼ぶ。

- 9) 以下のくだりは、日本人が空洞を神聖なものと崇めてきたことを知らない、了解しにくい。天人の眷属である「かぐや姫」がタケの中から生まれるのも、「となりのトトロ」がクスノキの根本の洞に住んでいるのも、この思想に基づいている。
- 10) 現在は、藁の保管中に羽化しないように最初に葉殺する。

文献

- 朝倉治彦校注(1970):『東都歳時記・第2巻』平凡社東洋文庫。
- 石原道博編訳(1985):『新訂・魏志倭人伝・他三篇』岩波文庫。
- 稲田浩二(1988):『日本昔話通観第28巻・昔話タイプ・インデックス』同朋社出版。
- 大槻文彦(1932):『大言海』富山房。
- 小野重朗(1984):正月と盆。宮田登ほか編『日本民俗文化体系(普及版)第9巻・暦と祭事』小学館。
- 小野蘭山(1992):『本草綱目啓蒙・第4巻』平凡社東洋文庫。
- 大林太良(1979):『神話の話』講談社学術文庫。
- 大林太良(1993):『海の神話』講談社学術文庫。
- 後藤基巳(1968):『中国古代寓話集』平凡社東洋文庫。
- 佐藤保(1994):銀河伝説・天の川のイメージ。月刊しにか, 5-7, 48-54。
- 島田勇雄・竹島淳夫・樋口元巳訳注(1987):『和漢三才図会・第6巻』平凡社東洋文庫。
- 徐堅撰(1978):『初學記』中文出版社。
- 菅原浩・柿澤亮三編著(1993):『図説日本鳥名由来辞典』柏書房。
- 武石全慈(1997):カササギ。樋口広芳・森岡弘之・山岸哲編『日本動物大百科4・鳥類II』平凡社。
- 竹田晃訳(1964):『搜神記』平凡社東洋文庫。
- 谷川健一(1983):古代人の宇宙創造。谷川健一ほか『日本民俗文化体系(普及版)第2巻・太陽と月』小学館。
- 中国社会科学院言語研究所詞典編輯室編(1996):『現代漢語詞典・修訂本』商務印書館。
- 鄭大声(1992):『食文化の中の日本と朝鮮』講談社現代新書。
- 中華書局上海編輯所編(1965):『歐陽詢撰・汪紹楹校・藝文類聚』新華書店。
- 中島敏夫解題(1990-91):『唐詩類苑・第1, 6巻』汲古書店。
- 直江宏治(1968):『民俗民芸双書13・中国の民俗学』岩崎美術社。
- 成末雅恵(1996):チュウサギ。樋口広芳・森岡弘之・

- 山岸哲編『日本動物大百科3・鳥類I』平凡社。
- 埴原和郎(1993):日本人の形成。朝尾直弘ほか編『日本通史・第1巻』岩波書店。日本論については、同書所収の網野善彦「日本列島とその周辺」を参照のこと。
- 漢語大詞典編輯委員會・漢語大詞典編纂處編(1993):『漢語大詞典』漢語大詞典出版社。
- 福岡博(1974):『佐賀豆百科3』金華堂。
- 洪浩培復刻(1969):『白居易撰・白氏六帖事類集』新興書局。
- 正宗敦夫編(1967):『倭名類聚鈔』風間書房。なお、異本によっては、カササギを「加佐々伎」と表記するものもあるらしい。
- 村松一弥(1974):『苗族民話集』平凡社東洋文庫。
- 守谷美都雄(1950):『荆楚歳時記・中国民俗の歴史的研究』帝国書院。
- 諸橋徹次(1999):『大漢和辞典・修訂第2版』大修館書店。
- 柳田國男(1968):天の南瓜。『定本柳田國男集・第6巻』筑摩書房。
- 柳田國男(1969):瓜子織姫。『定本柳田國男集・第8巻』筑摩書房。
- 柳田國男(1969):年中行事。『定本柳田國男集・第13巻』筑摩書房。
- 柳田國男(1969):犬飼七夕譚。『定本柳田國男集・第13巻』筑摩書房。
- 山岸徳平(1963):『日本古典文学体系・源氏物語第5巻』岩波書店。
- 吉成直樹(2000):七夕。福田アジオほか編『日本民俗大辞典・下』吉川弘文館。
- 吉野裕訳(1969):『風土記』平凡社東洋文庫。
- 依田千百子(1991):年中行事の比較研究。植松明石編『環中国海の民族と文化・第2巻・神々の祭祀』凱風社。
- 和歌森太郎(1970):『民俗民芸双書50・民俗歳時記』岩崎美術社。
- すぎたに・たかし
お茶の水女子大学 助教授
sugitani@cc.ocha.ac.jp
杉谷研究室ホーム・ページ
http://www19.freeweb.ne.jp/school/antennae/lab_index.html

Symbolism of the Seventh of July Festival

Takashi SUGITANI

1. Magpies' bridge

In the East Asia, there are two old stories concerning the Seventh of July Festival. One story, called *Star Vega*, explains the origin of the festival as follows: *The Emperor of the Universe had a daughter (the star Vega) who was a skilled weaver. After he let her marry an earnest cattleman (the star Altair), she became lazy with happiness. Then the Emperor divided the two stars by the Milky Way, allowing them to meet only once a year, on the 7th of July. On that night, a huge number of magpies gather to make a bridge for the Emperor's daughter. Young Chinese women, wishing to be good sewers like Vega, hold the festival on the evening of the July 7th.*

In the Japanese Islands, the magpie (*Pica pica*) lives in the lowlands of the northern part of Kyushu island facing Korea and China; it is regarded as a

naturalized animal. Its Japanese name of *kasasagi* is thought to be of Korean origin. The popular version states that the bird was introduced from Korea when 150,000 samurai led by Hideyoshi Toyotomi invaded there twice in 1592 and 1597; it is also possible, however, that they entered Japan as early as 300 BC, along with numerous Chinese and Korean immigrants.

An ancient Chinese document written in the 3rd century states that the magpie did not live in the Wa kingdom (the former name for Japan). According to the archaeological evidence, the capital of Wa was located somewhere in the Nara basin in the Kinki District on the main island. In the 8th century, the Imperial Government of Nara edited a series of *Fudoki* (Regional Geography), one of which stated that magpies inhabited a mountain near Kobe. However, the description of the bird's zoological characteristics resembled that of a jackdaw (*Corvus*

dauuricus), and Kyushu's *Fudoki* had little description of the area's flora and fauna. Another governmental document entitled *Nihon Shoki* (*Japanese History*) states that a Korean ambassador gave the Emperor a brace of magpies as a gift.

In spite of the ambiguity of its existence, the magpie has been mentioned in Japanese literature since the end of the 8th century; Japanese poets and novelists adapted the romantic idea of the magpies' bridge from Chinese poems. At this time China was ruled by the Tang Dynasty, and, during this prosperous age, the idea was widely accepted as a novel symbol of dating lovers.

It is dubious whether Japanese intellectuals really knew of living magpies, because their description was zoologically wrong in some cases. For example, Murasaki Shikibu wrote in her *Genji Monogatari* (*A Story of Prince Genji*), "a *kasasagi* stood in the shallow river water." Present scientists think this bird must have been a gray heron (*Ardea cinerea*), or *ao-sagi*. She may have mistaken a *kasasagi* (magpie) for a *sagi* (heron) -- a simple pronunciation error.

Later, in the 18th and 19th centuries, encyclopedists correctly recorded the magpie's existence in Kyushu, but it has not been able to proliferate throughout the islands due to ecological competition with native crows living in the forests. Searching through the Internet home pages, the term of *kasasagi* is contained in several per cent of the Japanese pages concerning the Seventh of July Festival; the symbol of magpies' bridge has gained little popularity among the ordinary Japanese people who have never seen the bird with their own eyes.

2. Angel Wife

The Chinese traditional of the Star Vega Festival, or *Qiqiaojie*, was adopted by surrounding countries, and became mixed with other respective traditions: airing clothes in Korea, and the Aqua-god Festival in Japan. In early July, in ancient Japan, people used to pray to the god of rivers and rain for a rich harvest in autumn. As the rain fell from the sky, they attributed it to this astrological folktale.

Prior to *Star Vega*, the story of *Angel Wife* had spread throughout East Asia. The standard Japanese version goes as follows: *Once upon a time, a man accidentally found lady angels bathing in a pond. He stole one of their feather-ropes in order to trick its owner into marriage; they wed, had children, and lived happily for several years. One day, the wife discovered her feather-robe and flew back to the kingdom in the sky, leaving a melon seed behind. The husband planted the seed, and the stem grew and grew into the sky. He climbed up to the kingdom to meet his wife's parents. They didn't approve of the marriage, so they tested the man with difficult farm-related problems. He solved all the problems but one, with the help of his wife's advice ("his dog's advice" in another version). In the last problem, he failed to cut a fruit of melon from end to end. Surprisingly, as he cut, a flood spouted from the fruit to make a river, which divided the man and wife. The wife called out that she would meet him on every 7th day, but he misheard the date for the 7th day of the 7th month.*

In China's marginal regions, there are other versions of this story, one of which happily ends when the man solves all the problems. Another one, perhaps mixed with the later *Star Vega* story, provides the man and wife with a magpies' bridge from the earth to the sky.

Ethnologists think that the melon was adopted in the Japanese version because it was a favorite food of the Aqua-god. However, melon was not a native plant to Japan, and, according to ancient Chinese documents, it was *Star Vega* who ruled the melon fruit. Therefore, we have to deny the uniqueness of the Japanese version; the symbolism which the ancient Japanese attributed to the fruit, of course, is unique and important.

3. Symbolism of the melon

Why did the angel wife insist on cutting the melon lengthwise? Kunio Yanagita, the founder of Japanese ethnology, conjectured that this melon is a gourd to be divided into two small canoes. Ken'ichi Tanigawa pointed out the symbolism of the gourd as a vessel of life.

I think that the melon is a symbol of the human uterus. When the fruit gets fat, the tissue of its surface tears to make stripes. The same biological phenomenon occurs on a pregnant abdomen. The connection between a melon and stripes can be proved by an old term of *uri bo* (melon boy) -- another name for wild piglets, who have white stripes on their back. Introducing an element of pregnancy into the story, a dog's assistance to solve the problems would suggest an easy delivery, like the dog. This ethnological belief has been so popular among the Japanese that an expectant mother still wears a belt-like charm on the Day of Dog indicated in the calendar.

Then, the angel wife's prohibition concerning the melon may imply the danger of having sexual intercourse with the pregnant wife. The husband must have ignored this prohibition in the real story. As a result, the wife suddenly miscarried and went to the Great Beyond. Once a year in the festival of the Seventh of July, her soul could come back to accompany him. The Seventh of July Festival was also once known as the Festival of the Dead, though this festival is now held on the 15th of August, according to Buddhism and the solar calendar.

Cutting the melon lengthwise was, I assume, not an

important element of the story, but instead an erotic metaphor for the female genitals. Here we should remember that *Angel Wife* begins with such sexual behavior as peeping and stealing clothes. This eroticism assuring fertility must have been indispensable to the festival for a rich harvest.

To pursue this symbolism further, the fruit of a melon includes young seeds that remind us embryos. We have to 'curette' them to eat the pulp. Also in sericulture, one has to boil cocoons to reel silk, killing the chrysalides in them. When the natives in this archipelago were civilized in the Neolithic Age, the females, who were newly engaged in gardening and sericulture, may have begun holding a festival in order to let those nature-souls rest in peace. I would call this sense of sin as the essence of our awareness of nature.

Key words: the Seventh of July Festival, folktale, symbolism, marriage, pregnancy, awareness of nature

Associate professor of physical geography
Ochanomizu University
Otsuka, Bunkyo-ku, Tokyo 112-8610
Email: sugitani@cc.ocha.ac.jp
Home page(bilingual): http://www19.freeweb.ne.jp/school/antennae/lab_index.html